



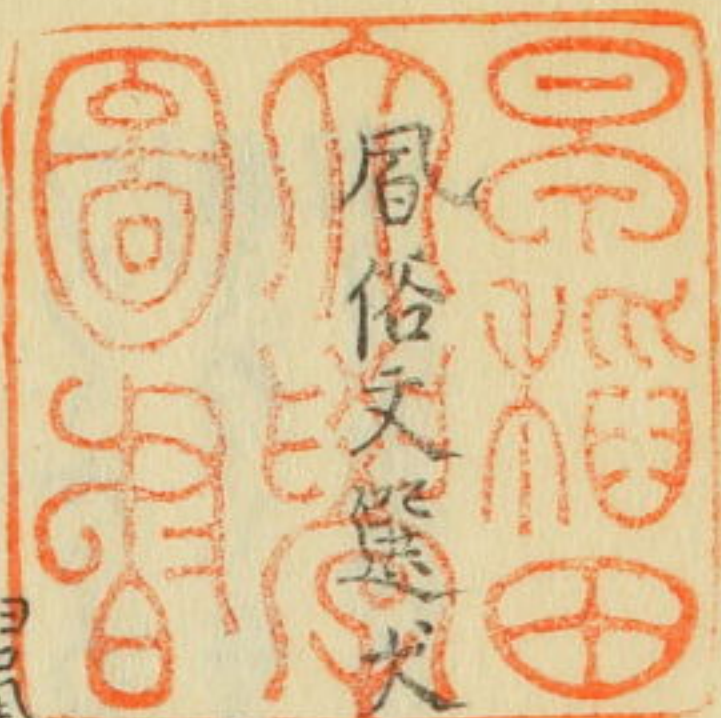
風俗文選大註解

卷三

5
4502
3



門 5
號 4502
卷 3



註解 卷之叁

江都

律 廿 分 我 著

鼠 賦 并 引

去 來

此賦以五音相通、假名字、為韻

鼠一ツの尾より尾又よめりよめり其の孫品あり四尺の鼠を圖とて
にりて大なる鼠をすちいさき鼠をすよとて山椒の眼小豆の鼻齒を多とつ
けて小袖のぬらふとて耳と木の芽のめくると尾をきつて錐のさやとて
はらうとてん脊脂の色はめくるとすくるとくも深おせり其行やおきて
常よめすみとて身を蓋ふ海にむくむく一ツなる乃賦を伴つて曰

山の井ま都て正月ハ世のつゆかゝるものをも多き孫すくと嫁う居
よふとて日の外嫁う居とつるもの

鳴るおろろのうにふり嫁う居 其角

光陰道行

昔 其角

妻戸を以て物より益々人目をわらへ里あるめくとからへん破ると

昭和十年
七月六日
購求

空ありぬいをむかひて地の比ヒをさうけてさきまのヒを一ゆひく
かろくやくしヒをいさますヒの鏡タリカミをちやう中にひきて其夫
をとりぬふかひ其ゆきよへすの財ヒをすまひちたもて其ゆきよき
めつひつこいんをさきまのヒに氣来てひひるひ内ハゆるく
外らすぶくかくつあゆまをそこをへハヒ入るかひりるま火々
やけぬるに其袖ヒのみかのるうかちをくひもちひきまて
てやつりま其夫の羽ヒをその風ヒのまをさきまのヒをさきま

三井の頼家、子足の勢い

白河院皇子ヒまきまひ三井寺乃實相房ヒ頼家ヒありよ作
せて皇子ヒ淨ヒ誕ヒのゆひのりあきまあきまのヒとて勅約ヒ
かくて皇子ヒゆ出産ヒまりりれハ頼家ヒの賞ヒをのむむヒとて勅
定ありよ三井寺乃戒壇ヒを建ヒまきまヒヤ出つれよ山門ヒ乃
我ヒとてちて勅許ヒありりれハ頼家ヒふぬいて山門ヒありハヒ
おぢまきと叶ヒの神ヒとて飲食ヒをとめて乃ゆ入ヒて行ヒひれヒ祈り
出ヒまり皇子ヒまきまヒちヒちヒ悪靈ヒぬきの氣ヒとありて山門ヒの聖教ヒと

くひやんれこれハ頼家ヒの怨靈ヒをのむ上下ヒをかくしを赤ヒ野ヒにたり
りヒのゆきよき出ヒ来てまきまヒのゆきよきけりるまのゆきよき
其靈ヒをさきまヒのゆきよきつるまのゆきよきつるまのゆきよき
まのゆきよき

みゆや 月の風乃 宛ヒまきま 止亭
年一 おきよりけさヒの風 嵐ヒ聖

寄大耳鼠

亭の影ヒ不ヒのヒにヒ白鼠 琴風
卯の花ヒすヒ傳ヒありきやぬれ鼠 詠行

花ヒのヒおぬヒれヒのヒさヒのヒ鼠ヒ乃鼠 鼠

おるヒとヒ声ヒ鳴ヒかりヒ鼠 葉ヒのヒ結ヒつヒ
まのヒらヒんヒ苗ヒ代ヒとヒりヒ甲ヒのヒ鼠 水花

頼家ヒもヒ弁ヒのヒまヒつヒありヒ鼠 許ヒ古

催る樂

老鼠

幸とてふる里はゆたか文母とて居ては西の老翁とてつつけき
つんつ法郎はすまん師はせな道遠よとやせられたつようなるし
て仕合と東娘の命を述ぶれどもなまぬは張湯の文をす我も思ふべき
狐狸の命とてんも焼死とてあつては後よりき深き祈り障
子のちりのま葉はるりとおもつればかりて長き別るるめ共事といひ
るをつひいふのやひをすまん世のわかれ里のわかれをむせ
よ流穴大比敵のふいふるるるるるるるるるるるるるるるるるる
けがし猫とはむもくも不喜るるる成ゆ彼おろしき睡士世
にお任せん西ふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

西根指とてつるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

いつむかのゆびくつるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
わづらひはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

旅乃賦并列

詩 一六

は賦 幸由つ句室よハ甲流記行とてお文ありるるるるるるるるるるる

風在介々旅の賦并小序

五拾年の行脚は一點の難も加らぬハ西上人のゆるの上り獲
氏八品の運旅は皆不平の上乃流浪ありあ人も是るるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
顔をあふるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
後のおまよふ入るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るる水村山郭本のり山のさすまひあはるるるるるるるるるるるるるるるるる
朝起くす通ハ甲斐の猿橋をたて上の飯訪はかり又もわある
の川音のりさに枕をまんと打下る先達の記行をひききてはるるる
和歌古戦場の由来をよめて旅行の袋よとめ足袋けきの破を補
ひ糸枝のあしをわけて枕の上はわけり我むつるるるるるるるるるるる
まおのつるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

三十一

七

ら八月旅をきてやと申すゆへ人足と已に前途をすめぬれば二月
上の武江の館を還

日く乃文章の才ある記行のあつて筆を止む程名前と云ふの白き
おほくハお事の集は出れいれをもらはれ去る旅の情のよきと
あつめあつた賦つら旅すの病のさめあかきあつてまを
返る今のついでよんれハ云作のかみは一列のれをす
張々風雅の花風雅の過客の魂西行宗祇の又おのり言誦詠の情あり

西行のうらみかまうの賦又西行の賛をうらみかまう
昔宗祇の播入の中として山寄はまよりのた小鶴のうらみかまう

代々ふるもまうて一丸のやうにうらみかまう
世々ふるもまうて一丸のやうにうらみかまう
世々ふるもまうて一丸のやうにうらみかまう

村上天皇御製
後村上院御製
宗祇
とせ成

同一段をよみハ則りハ民うらみ 貞徳

宗祇の坊舎といつたハ宗祇法師と同一坊舎はあつていふこと
一とて宗祇の生涯をたゞすれぬを他のうらみかまうといふこと

我翁白川の田植をす初め奥州のるをめり高鍬のな草に兵とてるを
みるあつて山の夕涼をよみ吹浦を詠め佐後ハ後々ハ天の川ハ初秋の社
をみるまより蛤の三見を詠めて七十余程を吟す号良ハ落髪ハ力量
を感して一鉢をかては尻をついて

奥の細道
判於てうらみかまう
ころもうらみ
号良

号良ハ河合氏よりて惣五郎といふ色甚のト号良ハ軒を並べてうらみ
水の旁を眺むける松島海客の詠めともせんとするをよらむらひと
湖の難といふことと旅立曉髪を判てすは深まよめをか惣五郎
及て宗祇ハ依て玉琴山の白あり更衣の力あてきと由
号良ハ服を病て伊勢の玉を詠むといふあはむらひは先きか
やうてあつた伏し

とかながらうりあがくははるもの候に雙危の別て雲よまらふら

かきうやまはなほむ 雲の雲 雲

大坂の庄へ入るまも仔細ありまの合類くまもを死さし如行のあま

一日芭蕉庵をくき繪の靴履のりふ附ま旅十作の馬をかきて齋して
某のまめは高野具風雅よくうり倍終をあつめ狂賊五浪よみ定か
るまの 細布の草まうりの類もあつ

風流のけいめやまらり 甲うまうし 翁

早女とるふくこやむし ちんぐ摺

陸奥福修飯山山村は高野あり土人の説はあ人のつる首傍あつ
まのふの草庵をむすひて住たり母ありあまうてせをわらうか
かり兼律傳の庵のみきう。不あんに千種のかちちを石の西より丹
青のまもて深細布にくすつ説唐の袷服 呉服の衣とふる。
一其草のかちち参差とみれまもあまらりすとつては深こめ
つむしそせの人これを怒ふ價よかて其代ものを油うて母を養ふ
るまもらひのまらり星霜くつりあまめれ石水中はうりあつて綾の

紋らせめぬる者ら已の形とまも今に朽やひまらにけ山里の田ま
奇あつ石の印をいひひ付て石の西を妻のまもを麻掛けいまは人乃
かけをえ侍まのいつの此よまもはまもはまも人あまひあけりあ
妻の附よいつれ都鄙とまもあつてまのまのまをめて石を麻を
すむる者するまも山里の職耕田の荒まらるまをわらみて石をま
ん為よ三十人軍の力者よあせてるまらる池の中押倒しまら
のあまらるまらる故にやま細ま水の中休めま其後自然子
水絶てま砂地まらるて石の傍よらまき水の流まらるあまらるま
まら細布を深りまらるらまらるまらる一人先を度知らるら
旅十作のりま菊阿全集は旅十作のりまらる胃あり又霜のりまらる
八作のりまらるありまらる十作のりまらるいつれまらるまらるまらる
かき一四のりまらるまらる後の中まらる

旅及奥まの深あまらる春酒を 許六
ゆきまらるまらるまらるの油あまらる
酒雲て 旅清いまらる 玉まらる

五月のやまゝ野りの大井川

香原八作

松尾宗房

秋や頂ノ頂磨や秋の暮日如
貝寄る風より家や秋歌の浦
行ぬや吉野とあり乃及山伏
星合の中や後多し童田川
松島や雪の白地の衣配
姉を子母かりしと雑子うら
ハ秋や天のけしとく

万葉丸

掃もろくやあちをばし
仙見日人の物ありき
る也とそり旅行し
俗以盗日須利
以爲行旅之具
若盛水物

竊盜去而麓乾 壁書之竊盜

早苗より我をくりきりぬ

宗因

旅店の上段は書院床敷菱のすし火のき火燵はやくかけて
入湯桶かきあげ居る底は小砂のさるいおぐの砂り
ハ春秋と云は根た根敷ハ藤すみ
つき鉄行地ら
つまねわら
セツといひ
大老のあ

合一僕の時
ておたを
よるのけり
世経や

かきく

あつ道の賣物又餘酒のなまあもろく磨針峠の峠をくつハ本末始
王のあつたわきめをふんてつり寒天より冷素麵をすむらうあつ道の
茶を餘酒のふりくもあえくハ見付の基より卵子の糞めきハ本末始
旅くも紙くやよこもみ錢の音後く筒をかけく見付の田梨く
何のくもくも

よかけ千春の密相や 宇津のなま

舟川の上るやん死の情きつかきく五月の大水かり借るを形よま
入おの草の戸らあもれと首けの借錢を納てきく思をくものハ
崎田令谷の賦まり水の流係を何と文川とくハ大さく細流あり
天竜の中の流く人足を空まきく人ハ股け入てるを肩かけ
て行あもりのハ百れななて舟駕も立旦那をわめくハ返
一坊の情也る士如死果く輕重は日月をまき一盃の酒は流然乃
兼そやなま一生を漂く飄くとすめて雲介の馬をかくあり炎暑
のりもまあのみくも板のあの下はありて蟻の都よいも後く飲食

聖まよつひ けかけて地ゆる土のめと地ゆる小使らけく
吸売らものくちよき錢を年の定ハ初めをりふんよむす
一とせのあつたもくつてせあも人のことく月日を吐替の事を定めけ
るハ世をあつてくも

出せもせかつ 顔やのく

宇津の山のちよみよ宗長法師の記行
大永四年二月十六日不二のあつたくまハ宇津の山は雨やつひけ
茶をむかよの名物十あもりハ一物よなるハ十のめらるるに
まくせ

末折やるも 解くハ宇津のく 共角
十あもりハ小雞なるハ 秋の風 詩名
十あもりハハあもるハ 魂やつ
鞠ののくハあもりハ細くハ
ハあもりハあつてハ 早はあ
春三月をあもりハあつてハ 路通

長巻を柳 4 かけよ十巻子 桐葉
巻楓 胎まきけりや十巻子 家同
まきけりるあつらふくま 巻あまきり る行

極月十日西吹りちねのりつに

いそいで足袋書くまのうらなはのり 具角

女我のよるも 録くふの白く十巻子のむかしのまきとにいそいで
柳子の十つとせ旅人のひるにまきとせるとする旅情をいそいで
わさけり小旗のあつらふのむかしのやえ旅のこころと今の世のまきとに
まきとるるまきとる今の十巻子のまきとるまきとるまきとるまきとる
名物のかきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる

鴨長の海通記 国部の里とてまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる

ひ西を胸よけききやうのりれハ行肩祖の服もよ流れて早夜う
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる

大極十圍園 都來是一貫 今此粉園子 誰成茂叔音
一二三四五 六七八九十 貫得天地數 無過無不及

遠品天竜川を西行發心集にあめるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる

那可とるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる

異聞集 淳子勢酔夢入大槐安国王曰吾南阿郡屈郷
為守凡二十載使者送出穴 遂定語尋古槐下蟻穴乃槐安

国又一穴上南枝既而南阿郡也
流浪漂泊の上よこそありるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる

かきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる
まきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとるまきとる



永流画



宇治の山十蔵子古子一圖

つゝやうくむつゝ 小豆粥 紅調粥
饅頭の唐韻めく まんぢうハ長まゝのち 東鑑ニ建長寺
のちといふに十字とあり十字を給ふ又十字を喫す(切り)
これハちまゝの修次を十文と云はる唐丁を合て四ツと云ふやうに
これに十字ありと云ふ

謎も亦よる古所謂廢詞コトハ即今之隱語所謂謎也
瑯邪代辭編

用之字謎 一月復一月 兩月共ニ半也
七步之詩 曹子建

煮豆燃豆其豆在釜中泣 本是同根生 相煎何太急
イトコ煮り今もする 芋牛房人考まへて 小豆を煮る者 汁也
不死汁々 不死の芋茎を煮て汁を飲ふ 小豆の汁也

あやねの舟よかめお あやねハ 船子なり
賦人つゝとて合
月スマツと云ふ故トのこまこの舟の扱声のすまツと云ふ

今あやねの舟といふあやねといふはあやねを煮るもえはゆる故也

文探上畧 かい條ノ説 陳素

花よりやの葉を梳るるに おひひめくからるる 亦又例の小豆と
をいれハ花のかしらを梳るる 牡丹餅といふは 花を煮て食ふ世
の内裡上臍を梳る花をいふまゝに 強飯といひ 煮飯といふ
るをもの子のかしらを梳るは 白のころひは 煮て食ふ 宮城野といふ
ろしめてハ 一作の別名にて 雑波の聲もすといふまゝに 仔細の後
萩の音もせぬ時ハ 隣を隔てる 名のかつ 煮るまゝに 河のつゝやと云ふ
ねハ 舟と云ふも 又煮るに けしや 山寺といふなり 煮て食ふ 和尙の
もてろしめた 山伏の才子をも 煮るも 煮るに 煮るに 煮るに 煮るに
かのかつも 煮るに 煮るに 煮るに 煮るに 煮るに 煮るに 煮るに
大伴謂 大伴粥 十一月廿四日 傳教大伴のこゝ
且の日ハ 小豆粥のこゝろを 招餅に入 粥の本を中より 入基前の 粥を
作す け式と下さぬおらして 煮るに 煮るに 煮るに 煮るに 煮るに
臘八粥 煮るに 小豆粥を 煮るに 十二月廿日 出山佛の日也

九多のあきけりあつらんを
家来 呂安題 鳳

世説曰嵇康與呂安善每相思子里命駕安後來
值康不在喜字公穆嵇康兄 出戶延之不入題門上
作鳳字喜不覺猶以為物

閑居ノ賦

坂村

廬山の雨のあは月をさしひんれやて専のちさうあは
や吉ゆゑあは任うくくさうきせり巖岫のささきよりハ中く住まう
けめ栗栖や、ねくの菊おまの岡柳も柑子の垣よんおとさし宇治
山のかんあまの柳柳の風流をつくと人食むささきう花を
淋 きさうりや水さうりの雪をささきふれ東籬のわさめ
て背の底をささきり西嶺のささきをさうりてささきのささきりす

蘭省ノ花ノ時 錦帳下 廬山ノ雨ノ夜 草庵中

つれ草花を愛し月をささきをのささきものささき
春のゆくあつらんも控ありんば

神を月のころ栗栖やといふをささきとてある山里よ
ささきささきの細道をささきとて心ゆる住り
ささきささきの見の雪をささきとて心ゆる住り
ささきささきの見の雪をささきとて心ゆる住り
ささきささきの見の雪をささきとて心ゆる住り
ささきささきの見の雪をささきとて心ゆる住り
ささきささきの見の雪をささきとて心ゆる住り
ささきささきの見の雪をささきとて心ゆる住り

書記を武内の宿祿忍熊王と遊むを遊ばはあはれもちや
つねよを遊ばは遊ばは遊ばは遊ばは遊ばは遊ばは遊ばは
てはささきささきの血流れて栗林はわらわらわらわら
近其栗林の菓をおもひものよめささきささき
つれ草よんつれ牛を角をささきささきささきささき

秋々東籬のよに 採菊東籬下 悠然見南山

心より重きを重むる 心より重 吳天雪

茶粥 秘結のわさしは五臓を洗淨し 帝子皆身ハイレシのさびき音はふるをかへ
くし 詩は三籟のおもむきさをさくし 歌は山家の風を好むは桶一つ 錦二つ
置三より本四五体も真の柏子をわけて 帝のゆくえをりすれ 自利の
自由をばるる車ハのあやうきものを 壁一重は市声の喧しよをなぐてす
くれ一投は車ふるのさくしを 避くし世を捨てせよ 捨せよ捨らるるもひひつるも
まてゆきゆくし 詩の宗居はいつくし

茶粥 ぬるもさう 隠居の上を つま 習ハイレシが今もさうよりの管中へ入
てきをもちく 綿子をつらり 詩は三籟の熱くは吐きよ天籟地
籟人籟のふるもいりて 天地自然の利をささると 文意をささく
めり 西行は山家集の風骨と和漢の對句を 取らるる 千石はか
らうと 八体の隠居者の傳へみら 五斗は 腹をかめぬ世はなう
りはく 是 近隠者の上をのこし 又 小人の宗居のさるものなん
よりの 文意なり
つらり 卑 後世をわらう人者 秘た籠一つは おまき也

宗居の種味 浮世の碓り 納豆汁 其角

今の宗居ある者をえらに 今食は八珠をつら 酒より五味をくむ 枳板
の障子より四季の花をも 彩りば 月の柱より 樟ふくしの名木をか
む 類より花細青の文字を ちりめ 軸は 小歌 浮瑠璃の 曉アサキ
は 水と流るる 亭をきつ 琴三味線の夕 小歌 浮瑠璃の 曉アサキ
隣家の 障子をつら 行人の 足をむ 粉白く 黛翠アサキなるもの 屋をつら
常座く 袖まき ぬい 廊をめぐ 牡丹芍薬は 影をうつ 菘鉄海石
に 賊をつら 俗に 文藝とく 獨り 今世を立て 月の
光るを 奪ふ 或は 地蔵 柏杞子を 植て 地をうつ のい 又 瓜 茄子を 作り
て 八百の 店はおひ 夕顔の 借屋は 隣の 生業を 借り 相類オモイの 菓搦キモチより
錢の 弄用を きく 小人の 宗居も 彼清負の 宗居と 名を 同くせん 也
取人 つかう あり 小人 宗居 不善を するは 宗居の 徳なり 一
分 我つら 今の 宗居あるもの つかう 小人 宗居 不善を
なすは 取人の 言まふ つかう 小人 宗居 不善を するは 宗居の 徳なり
を つかう 金錢の ような ありて 汚名を 残る人をつら 一

後陽成帝これをして庭より引田淡路極に任す近世は盛也

文選潘安仁閑居賦 灌園 嚮蔬以供朝夕之膳

隱居 虞仲事遠ハ隱居 放言自中清 虞仲權

和名抄 疊 和名 ち々美

くみくみなる重なるすーありひろきものをたて換へたりつむるを

くむといふもおれはかきつむるも其疊は又別あり長帖短帖狭

帖平帖厚帖薄帖帖の字疊と音をかはしり異なるなり

書記ニ菅置八重 是疊八重 結置八重

万葉十一くみくみかきつむるあむかま 又疊くみくみ平郡の心

牡丹芍薬 芍薬ハ花の容う 芍薬約う故にかきつむるなり

草木の類 百花の賦はくみくみ

菓搗 今の中ヤマホトかき付たり古本よりしてキテモリと加ふ故

くみくみなる重なるすーありひろきものをたて換へたりつむるを
くむといふもおれはかきつむるも其疊は又別あり長帖短帖狭
帖平帖厚帖薄帖帖の字疊と音をかはしり異なるなり

招 兔 賦

ま 考

西方に吾等の魂あり行つては魂すまはるまれ 神皇月十日あり

湖南の四草はつ人たて魂を納まこはるく 魂すまはるまれ

東門は春の花をさかきおるを別をくらむ 蓬蒿は秋の月落れハ人甚

く 佐はるるぬされハすれ草の住く世の中に何れ卯の花の垣根ハハ

らん時々のりあるらんらん春の唇の結ハかすやあむ走らんハ

ひつろは行つて還るは乃む還まれ 王孫むわら草とおひぬ

蕪の香いよや衣はくむむはつて花唇の穂は出てハナはるハハ

かきつむる魂すまはるかきつむる

西方に吾等の魂あり行つては魂すまはるまれ 神皇月十日あり

湖南の四草はつ人たて魂を納まこはるく 魂すまはるまれ

東門は春の花をさかきおるを別をくらむ 蓬蒿は秋の月落れハ人甚

く 佐はるるぬされハすれ草の住く世の中に何れ卯の花の垣根ハハ

らん時々のりあるらんらん春の唇の結ハかすやあむ走らんハ

ひつろは行つて還るは乃む還まれ 王孫むわら草とおひぬ

蕪の香いよや衣はくむむはつて花唇の穂は出てハナはるハハ

かきつむる魂すまはるかきつむる

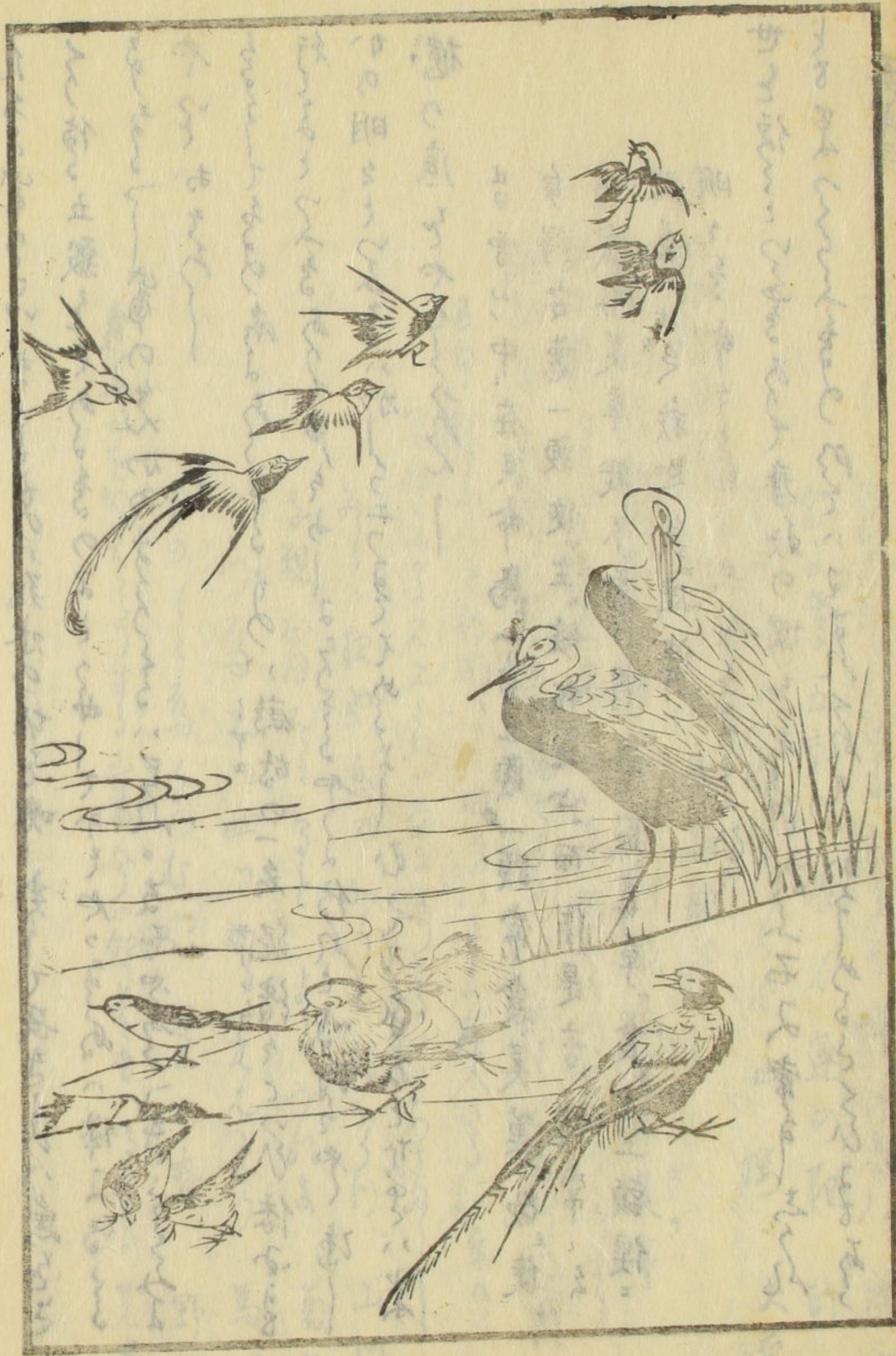
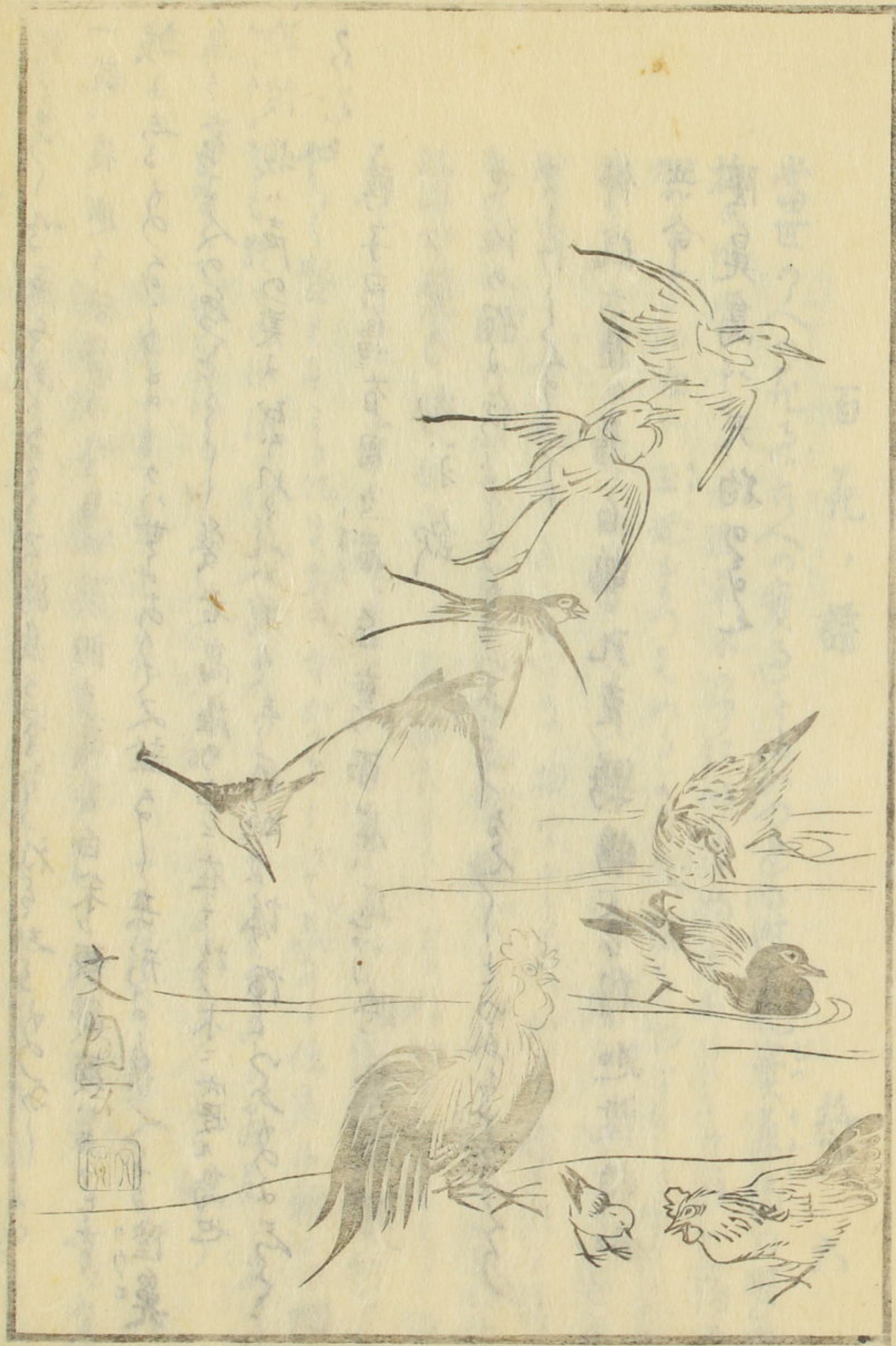
二月の二日... 春の草... 土のト... 酒堂土

陸奥... 坂田... 土のト... 春の草... 酒堂土

とらね... 捨石... 樹... 音... 別堂

子... 鐘... 助... 普...

むが... 信... 詩歌... 信あり... 世の指を



系さうし 服 一もつり 咲くさうし 去来

花は梅を付くハ花と梅と一由なるものやうに在るを尋ねて
付くハ花の花うらふ山の梅と付く

花衣花の袖 衣類花の染心の花又花の春花の都なる類又花
はてゆく伴せざるものらんかやうの花は梅を付く

花の發句は隔句 梅屋山吹雪とすて花の咲梅物付くは
發句の正花を他の花は取らぬ本意はあらず

賞就おあく出れり是れ言的執り是を甲と云ふ
花千のまといふかきり 独吟千のまは独者別なり大花

千句才四の隔句 梅あり才十の隔句 梅あり 隔句の隔句
右の發句はあらず

羽をとり花よ 花よふあくる鳥 正秀
さうさくや 都は牛の白ひき 酒堂

月利よさけ 瓶とけり 山梅 心成
花枝を壘地のふるさくは 本用

海棠は月く時をゆるる野良のたまと作る風習ひも盛なせの中
梅のまんと質素うてくるゆひか 誠は香のまき一色のま

ま本意なれ

海棠又かきり 唐も元ハ海外より来る故ハ海棠と名づく
異名花仙唐ハ海棠を以て才一と云 詩人最賞就せり

句を考

海棠の花は満月 秋乃月 月 其角

睡はるまゝを満月と云ふはかなげに満月のまあるま
き事無きまゝを満月と云ふはかなげに満月のまあるま

優艶は白うらをさうさう 趣向も白うらをさうさう
おのまゝをさうさうや おのまゝをさうさう

おのまゝをさうさうをさうさう 先達のまゝをさうさう
吟心をさうさうめりめり今秋はあつさり

賈耽著百花譜

以海棠為花中神仙

不生不滅の心を

海棠の新を 悟を 涅槃像 其角

梨花は古書の傍に傳ふ妾の如くよりつ物おもひよちまつる常に
人の心よまらるる如く

梨花山菜とてつるも走るも人家のあり迫きあよく實をむすふ
性定をとおるれは 異名快菓 果宗 玉乳 蜜父
凡て本草花をもてたつるあり實をもてたつけるあり梨栗柿
らと実といふ縁と實のふれ

春よせ三月 差二栢梨一かたりすむ 佛名會

内裡は佛名の中次は僧流はすむ酒をつるあり佛名乃
中次僧流の咽のかきをやめんとも栢梨をくさるる 今の世は酒を
のむるもむし和菓某といふ人攝津は栢梨の庄にありたの庄
よせしれ 其地の利をもてつる酒なり
夫木集とてつる云世の俗の中のおもをたるとすめおきん成心

梨あつのつるといふ詞をいみてあつのつる

相模集 おきく 梨斗なるなる代あつのつる

あつする 梨は 梨の 許六

この年すはめてま 梨のむ 梨斗

椿と只あつの人の本書とむくもつ物もつる風俗をも似せはあつりに
家を治めを僧めるともつる傳れもさるる世色なれは尾花糖子
印をともめつるおのよき花なり

尾花糖子 水こり 花椿 尾

いよもつるわあつて尾椿 椿う柳 正秀

文の尾は椿を道てむけとる 利斗

確やあつとる 尾 椿 桂士

万葉一

巨勢山のつる 椿つる みるあつる 巨勢の虫也

日本記 椿の油をとつてあつる 送られしりえとる

推し春耕の氣きり出雲のるをつる

即五八也。女我らさき尾を一八つふは一八井の字のよきより田家の棟へ持
草を二八つふ水よりして火の出たをよくる。祝語より天井藻井の類也

蔵人らさき命 二十番

青の首らさきあぬさき立居のよ修りさの月をさるる
あつらひのおひいやくさきさるるかせきさつとりの世の月をさ

たねさきに甚くさきさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
つとらさるるかせきさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

あちさきや名立居のつとに世あさるるあさるるあさるるあさるる
三は川さきさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

たねのさきさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
後以右馬路

牡丹と龍を対をゆるる妾の天下にさるるさるるさるるさるるさるる
のいささるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
嫉妬さるる

荔枝、此名花一牡丹、無二甘實一
牡丹のさきさるる牡丹はあさるる牡丹牡丹と牛さるる

唐戸さるる取きてさるる牡丹さるる 許六

花石のさるる牡丹の花の影 女我

牡丹花さるる牡丹はさるるさるるの月 許六

つとらさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる 女我

その雪さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる 女我

牡丹花名宵栢子夢庵

宵栢泉栢塚は廻り付牛はまかり行く自ら謂てつと主君をりりめ
んと歌するものあり、則我をとむつとらさるるさるるさるるさるる
に印粉を基つとら者あり出迎てあまきに主君をさるるさるるさるる
つとら止住す廻る古今集の秘言を授くそを傳傳さるるさるる

芍薬とつと花をいませる娘のよらひも二八はあまらさるるさるる
けぬえさるる心地さるる

芍薬はホ日の歌心さるるさるる

芍薬にさるる十葉のさるるさるる 尚白

芍薬やゆ次をひらけさるるさるる 考

かゝるに際るきに於て一月の日記を日々に於て引連し
よき空晴きりの日さし出るに心地よきは粧ひ衣装つてあ
かすのめきいなるも似たり

和泉塚に宗椿として書のあるは、浮氏物語に
部目お鳥の巻より筆おるは空に牡丹花が栞かれ
う心をあられみ

筆よみ心はかけしちきりや折しは消し物部の
草庵集 揮のめぬけしをぬるの花のついで

空殿乃世のふさをとらふは、折あるまぬお朝の花

ついでにむらさきかほは、折るは消し物部の

朝顔乃瓢かきしは、折るは消し物部の
お鳥や七板の伽り別と対 足拙

お鳥や七板の伽り別と対 足拙

蘭の花と蝶の羽と薫すと先師の勝りさか出傳るも其佳
人の西朝もついでに先をこされて口を笑ていそ

其日のあつさある茶店に立よりていそ
其の女あり名は登りてさかのひきぬ出りていそ

茶の香や 蝶乃 翅や 薫す

茶の香とある才一は阿房宮の殿に煙の斜は雲の
よき茶の香は椒葉を林にまきし

け草ら男のうらまは花のうらまは女の梅水は花の心
よき茶の香と自ひ芳一は淮南子に出る

孔子見蘭嘆曰夫蘭也 昔田為王者香 與哀草伍ス乃十
授琴鼓之 歌倚蘭操

茶の香や 袴かきし 梅水
風仙花といふ花は是もけしは粉鉄燭を粧ひ人の眼を

やうなめきいなるも似たり

花桔梗 けしき切をふきんに 諷声

秋露の花すきとる 桔梗汁 柳梅

細工もろぬ 桔梗のつみみうか 随友

秋らやさき花也さしてまよとりてあすき次女をすくおられど秋といへるを同よて人の心をこころいゆるたぐら地下の女のよくあひむくやみつこ

草庵集 右系を文光吉於仁初吉よ侍りしなり

春のこの花とや人のとさく人秋の錦を来てよ見よう

侍りし返りぬに

秋秋の花のにしきよ立よしん庭のさくらのおきぬ

秋の露あつく露の 隣り 那 翁

伏座りや小秋よあう 麻の布 玄来

草芥よそれ、重い、秋の露 孝由

山秋乃活井とらう 去る 言水

あつたるよさる 秋乃 けり けり けり

菊乃隠逸なるハ和漢ともに名立る花るれあはてらういひこり
風流物好目立るるをききこりいよきか乃おとをたにおくれて形うる
にとるれよ立るのひあひいよこにすよなるやうのの登るれいよけつ賢う
どおろけくもあはれいよあるおさなきのひいれて心まの世あや
住こひるもとらうとおもくもいひこり

る菊に隠者の存著あられき 許六

菊よかりのさか 茶玉乃 八のうか

精進の帯ひらき さいくの花

山科乃五荷の束や ちんくのむ

浮葉なる 一年好きの菊 畑

琉球とらを 花々 菊乃酒

古き者の菊や 堅田乃地侍

へつ近、たまの鶴や 菊 花

末度乃かけをうす 菊 花

花ひの 武士のまゆや 菊 花

雪の霜をいつき雪をかつける中を忽化と積雪をつらとて天地造
化の行つらざるありと感せしとて、我々の果のそとに三つ令は
山を圍むといふ雪はあまひつけ風流のある心地をす

三つ令は富山の園は雪の結晶花のつらき雪を結せり

雪の降る万石も 雪の底 詩六

雪の降る万石も 雪の底 乙由

雪の降る万石も 雪の底 乙由

雪の降る万石も 雪の底 乙由

牡丹の雪をよれどなごたは伏見の合内せぬさるの地せ阿工商の
お辰新をうつくち交りぬる白地の娘も傾む風俗をあらひ養文入
生才魂の里かつる雪をいつひてす牡丹のま振舞はゆれぬあ親い
はより悲しと制しつむ時とをさるる大まらるるいまはなごん

事文類集五 齋のふの人他かす時牡丹一茎をあてて我は全

に不民あはげ花栞るん其後数年を居て雪の中より牡丹

雪を真心をあてはせしもう

牡丹定かろき 盛 一う那 尺草

牡丹の花りま 蝶 東来

牡丹のあまひ 牡丹 貴花

雪中牡丹

るるの八重つむ雪を深見草九重をうたふ雪をそん 尺草

當世の人乃花を有人の實を鳴呼つたの時、花實も梅の世あらん

或爾に當時の人情の花をうたふ雪をそん 尺草

よつてくつめし人の耳目を動しつる今先生、想ふ所の伝説乃實は

いらるをうたふ雪をそん 尺草

入さるる雪をそん 尺草

の人乃葉をうたふ雪をそん 尺草

よる一、那氏の丸顔らんちや風俗の傳あり 舞の青きあまの 燕掃のあま

ら顔下戸上戸をうたふ雪をそん 尺草

坐ひのあまを伝説の實をうたふ雪をそん 尺草

さんちやハ牡丹のうたふ雪をそん 尺草

此画波む... 筆意を... 故は画一向の拙く... 初心の筆水... 漢濃を...
形を... 筆意を... 故は画一向の拙く... 初心の筆水... 漢濃を...
形を... 筆意を... 故は画一向の拙く... 初心の筆水... 漢濃を...

公方義持公此殿主の画を... 故は... 拙く... 是を... 筆意の...
一日此の志を... 故は... 拙く... 是を... 筆意の...
一餅我... 故は... 拙く... 是を... 筆意の...

大寺に懸... のひ... 是を... 寺中...
る... 明此ハ吉山... 東福寺の大道の...
絶んと... 明此... 大道...
註の号あり... 大道... 不勤の...
中より... 是を... 時画...
神は... 是を... 時画...
や朝文... 是を... 時画...

夕立ち画はかく風の... 哉人
氣... 是を... 許六

111

是より多かつくかの 追分路
 何れをくもて路をわけしやせむ
 是れをくもて路をわけしやせむ
 月よ花よ細工負走人とう
 画賛
 唐柳子の血をてけて牡丹は 李由
 画菊
 菊むく 花むくのちよかきとく 其角
 風俗文選大経解卷之三終
 薛甘藏板

書

京都	三條通并屋町	出雲寺	文治郎
大坂	心齋橋通博労町	河内屋	茂兵衛
江列	彦根 上町	小川	九兵衛
同	白壁町	本屋	太兵衛
東都	日本橋通壹丁目	須原屋	茂兵衛
同	貳丁目	山城屋	佐兵衛
北之	神明前	岡田屋	嘉七
日本橋	通貳丁目	小林	新兵衛
本石町	十軒店	英	大助
浅草	茅町貳丁目	須原屋	伊八
北之	神明前	和泉屋	市兵衛
大傳馬町	貳丁目	丁子屋	平兵衛
横山町	三丁目	和泉屋	金右衛門
同	壹丁目	出雲寺	萬治郎
馬喰町	貳丁目	西村屋	與八

肆

